



題字：宮川英明 校長

創刊号

平成 21 年 12 月

熊本高専だより

熊本高等専門学校開校記念式典



新「熊本高専」誕生!!

革新する技術、創造する未来 ～夢へ翔る 熊本高専～



CONTENTS — 目次 —

◆ 開校記念式典挙行!

- ・校長式辞等 … 1
- ・式典に参加して … 6

◆ 開校「熊本高専」

- ・校章・校歌について … 7

◆ 新学科長・新センター長より

- ・新学科長あいさつ … 11
- ・新センター長あいさつ … 13
- ・新専攻科長あいさつ … 14

◆ 既設学科・在校生より

◆ 学生会だより

- ・電波祭／高専祭 … 18
- ・高専大会等報告 … 19

◆ 諸だより

- ・後援会だより … 23
- ・保健室だより … 24

◆ News & Topics

- ・最近のニュース … 25



校長式辞

校長 宮川 英明

本日ここに、文部科学省高等教育局専門教育課長 澤川和宏様、熊本県選出国會議員の皆様、兵谷芳康熊本県副知事、キャンパス所在地である合志市、八代市の副市長、谷口功熊本大学長をはじめとする近隣の大学長、高専校長、熊本県工業連合会長、お付き合いさせていただいている企業、中学校の校長など、多数の方々のご臨席を賜り、熊本高等専門学校の開校記念式典を挙行できることは、私ども学生、教職員一同に



とりましてこの上ない慶びであります。ご多用な中をご臨席賜りました皆様に、心よりお礼を申し上げます。

熊本高等専門学校の前身である、熊本電波高専は、昭和 18 年に財団法人熊本無線通信講習所として設立後、昭和 24 年に熊本電波高等学校となり、昭和 46 年に熊本電波工業高等専門学校に改組され現在の合志市に移りました。一方、八代工業高等専門学校は八代市をはじめとした熊本県南地域の要請により、昭和 49 年八代市に設置されました。その後、両高専は社会の要請に応え、学科の増設、専攻科の設置など様々な改革を行い、これまでに両校合わせて本科卒業生 13,085 名、専攻科修了生 482 名の有為の人材を社会に送り出し、各方面から高い評価を得てきました。これは正に、中学卒業後の頭脳が柔らかい時期からの 5 年間あるいは 7 年間という、精神面で飛躍的に成長する多感なときを、発達段階の異なる幅広い年齢層の学生が互いに切磋琢磨する環境の下、熱い心を持つ教職員による、学校で、寮で、課外活動の場での献身的で愛情溢れる技術者教育、人間教育があつてはじめて達成されたものであり、これまで両高専の歴史と伝統を築いてこられた歴代の校長並びに関係者に心から感謝申し上げたいと存じます。

さて、皆様ご承知のように、平成 16 年に全国 55 の国立高専は独立行政法人となり、国立高等専門学校機構により設置・運営されることとなりました。

この度の高度化再編による、熊本高専の設置は、平成 18 夏に国立高等専門学校機構がまとめた『国立高専の整備について～新たな飛躍を目指して～』に基づいて、同年秋に熊本地区高度化再編検討協議会を設けたのがスタートであります。文部科学省のご指導により、昨年 12 月に設置審査が通り、年度末には、地元選出国會議員の皆様のご支援により必要な法案が国会で可決成立し、この度の高度化再編が決定しました。この間、熊本県、八代市、合志市、熊本県工業連合会をはじめとして、各界各層にご理解と力強いご支援を賜りました。この場をお借りしまして改めて心からお礼を申し上げます。また、両高専の後援会、同窓会の皆様にも温かいご支援を頂きました。厚く感謝申し上げます。

今、世界の経済社会構造は大きく変化しており、技術者に求められる役割も従来とは異なってきています。国際競争力強化のため、生産性向上のため、また、持続可能な循環型社会実現のために、イノベーションを創出できる技術者が求められており、実践的で創造的な高度技術者教育を行っている高専に対する期待はますます大きくなっています。このような社会の要請に対応すると共に、地元の

期待に応えるための改編がこの度の高度化再編による熊本高専の開校であります。10年20年後には振り返って見たとき、あのときの改革は時機を得たものであったと評価されるものと確信しております。

熊本高専は、地域のニーズ、時代のニーズに対応した高度な技術者を育成するために、ICT技術を核として、熊本キャンパスはその応用分野、八代キャンパスは複合・融合ものづくり分野に特徴を持った学科再編を行い、本科教育のさらなる高度化、専攻科教育の拡充・強化、さらに、「ICT活用学習支援センター」「地域イノベーションセンター」「PBL・総合教育センター」の3センター新設により、教育研究の高度化・活性化・国際化を推進し、課題発見・解決型のチャレンジ精神に溢れた視野の広い人材を育成すると同時に、企業との共同研究や人材教育支援、小中学校の科学技術教育支援等の地域連携・地域貢献活動においても、皆様の要望や期待に応えてまいる所存でございます。

高専教育だけがもつ、早期からの、発達段階の異なる幅広い年齢層の学生に対する一貫教育の特徴を活かした、豊かな人間性、社会貢献精神など人間力・社会人基礎力の育成は新高専になりましても継続して参ります。

最後になりましたが、新しいモデルの高専として、国立熊本高専は時代や社会の期待に応えるため、教職員一同全力を尽くして参る所存でございます。今後とも、ご来臨の皆様はじめ、関係者の皆様方の変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げ、併せて、ご臨席の皆様の益々のご発展とご健勝を祈念申し上げ、式辞とさせていただきます。

平成21年10月16日



理事長式辞

国立高専機構理事長 林 勇二郎

この度、熊本高等専門学校の開校にあたり、本日ここに、記念の式典が文部科学省はじめ、熊本県、八代市、合志市並びに地元の多くの関係者の皆様方のご列席のもとで挙行されますことは、国立高等専門学校機構として大きな喜びとするところです。

新設の熊本高等専門学校は、昭和46年に国立高等専門学校として設置された熊本電波工業高等専門学校と、昭和49年設置の八代工業高等専門学校とが高度化再編されたものであり、熊本電波工業高等専門学校については、昭和18年に財団法人熊本無線電信講習所を源流とした設立以来、官立無線電信講習所熊本支所、国立熊本電波高等学校の前史を連綿と刻んでまいりました。このような両校が、これまでの輝かしい成果を基に、ここに「社会のための高専」として新たに出発することができましたのも、宮川校長、江端熊本電波工業高等専門学校校長をはじめとする歴代校長、教職員各位並びに同窓生の皆様のご努力と、熊本県、八代市、合志市をはじめとする地元関係者、産業界の皆様方のご支援ご協力の賜物であります。ここに感謝と御礼を申し上げます。

国立高等専門学校は昭和37年の設立にはじまります。平成16年には55校を1つに束ねる独立行政法人国立高等専門学校機構となり、そしてこの10月から、高度化再編により、宮城、富山、香川、そしてこの熊本地区において4高専が新たにスタートいたしました。

5年一貫教育を基本とし、「創造性のある実践的技術者の育成」を使命とする高専は、専攻科の設置や产学連携の強化をもって有為な人材を育成し、我が国の工業の発展と経済の成長に大きく貢献してまいりました。しかし、社会が変わり、産業構造が変わり、科学技術に対する意識が変わる中で、高専は、その来し方を振り返り、存在理由を問いただし、行く末を展望しなければなりません。

今や、世界の国々は科学技術創造立国を標榜しつつも、その一方で、エネルギー・地球環境などの持続可能性、コミュニティー社会の形成や安全安心な知識基盤社会の構築が問われています。それは、科学技術に対する社会のイノベーションへの期待であり、同時に科学技術に問わ



れる責任と自覚でもあります。

教育機関として、我が国の科学技術に基幹的な役割を担う国立高等専門学校機構は、第2期中期計画において「産業構造の変化等を踏まえ、想像力に富み、人間性豊かな技術者の育成という視点に立って、大学とは異なる高等教育機関としての機能を充実強化する」ことを基本方針としているのも、まさにこのような責任と期待に応えるためと言えます。

熊本高等専門学校は、社会や産業構造の変化に対応し、両校の8学科を電子情報系と複合工学系の2工学系6学科に再編するとともに、より高度な人材養成に向けて入学定員の増を含めた専攻科の再編・拡充を行い、教育の充実、質の向上を図ることになります。また、地域社会との広域的な連携拠点として地域人材開発本部を新たに設置し、地域に根ざした社会貢献事業を推進してまいります。

熊本高等専門学校の教職員ならびに学生諸君の皆さんにおかれでは、どうか新たな決意と高い意識をもって、高専が掲げる「創造と実践」に挑戦していただき、この地から世界に向けてその成果を発信することを期待いたします。機構は、これらの活動を支援し、かつ協力していく所存です。

終わりに、この地域の自治体、産業界、熊本大学をはじめとする高等教育機関、その他、多くの関係者の皆様方に、この新しい熊本高等専門学校に対して、これまで同様温かいご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、ご臨席の皆様の益々のご発展を祈念いたしまして式辞といたします。

文部科学大臣祝辞

文部科学大臣 川端 達夫

熊本高等専門学校の開校、誠におめでとうござります。

高等専門学校は、中学校卒業段階からの五年一貫教育により、幅広い分野で活躍できる実践的・創造的な技術者を養成する質の高い教育機関として、社会の各方面から高く評価されて参りました。知識基盤社会に移行しつつある今日、科学技術に携わる創造的な人材の育成は、ますます重要なとなっております。

とりわけ、ものづくり教育の中核を担う国立高等専門学校は、時代の要請と国民の期待に応えるとともに、それぞれの地域の高等教育機関として、地域社会の要請に対応した教育研究活動の強化を図り、その質をより一層向上していくことが求められています。

このような中、幅広いものづくり関連学科を有する八代工業高等専門学校と情報通信関連分野を特徴とする熊本電波工業高等専門学校が、それぞれの教育研究資源を結集し、新たに熊本高等専門学校として開校に至りましたことは、教育研究の質の向上や地域社会との関係強化の観点から大きな意義をもつものであります。

このたびの新たな門出は、校長先生をはじめ、両校の教職員の皆様のたゆみない御尽力の賜物であり、深く敬意を表しますとともに、両校を様々な面で支えていただきました地元熊本県、合志市、八代市をはじめとする関係各方面の皆様のこれまでの御支援・御協力に対し、厚くお礼申しあげます。

新しい熊本高等専門学校は、「専門分野の知識と技術を有し、技術者としての人間力を備えた、国際的にも通用する実践的・創造的な技術者の育成及び科学技術による地域社会への貢献」を設立の理念とされました。

今後、この理念のもとに教職員が一丸となり、熊本高等専門学校が、新しい風を呼び起こす魅力ある学校として大いに発展されますことを心より祈念し、わたくしのお祝いの言葉といたします。



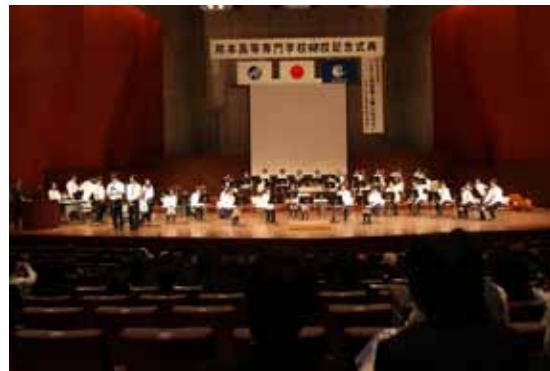
文部科学大臣祝辞（代読）



会場となった県立劇場ホール



校章・校歌作成者等への感謝状贈呈



両キャンパスの吹奏楽部による合同演奏

開校記念式典を挙行！

新「熊本高専」のスタートを祝い、熊本・八代、両キャンパスの学生・教職員の心をひとつにするイベントとして、10/16（金）に、開校記念式典を挙行しました。当日は、秋晴れの好天に恵まれ、会場となった熊本県立劇場コンサートホールは、開式の13時までに、地域企業関係者・OB等を含めた2000名以上の来場者で埋まりました。

式典は、三部構成で行われ、まず、第一部が、本校：宮川校長、国立高専機構：林理事長の式辞に始まり、文部科学大臣、熊本県知事、熊本大学学長、熊本県工業連合会会长の祝辞、齊藤副校长による新高専概要紹介、神田副校长の校章・校歌の披露と続きました。

校章・校歌披露では、公募110作品から選ばれた校章デザイナーの井口靖久氏、両キャンパスで募集した「校歌に入れたいフレーズ」を生かして作詞を完成された藤子迅司良氏、両キャンパスを訪れ、そのイメージで作曲された石川和彦氏への感謝状贈呈も行われました。第二部は、NHK解説主幹で、科学番組やロボコン等のプロデューサーとしても著名な、室山哲也氏を迎、「22世紀型人類になろう」の演目でご講演頂きました。

講演では、地球と月の関係についてのクイズを含めた「たぐいまれなる環境としての地球」の話に始まり、「脳が世界をつくる」話、そして現在の困難な地球環境：「温暖化」「人口爆発」などの課題の話へと続きました。そして、学生諸君が、「22世紀を迎えるための課題に、エンジニアとしてどう向き合うか」という問い合わせと激励で終わりました。「災い転じて福となす」の気持ちで「攻めの低炭素化」に取り組んではほしいという呼びかけが印象的でした。

第三部では、両キャンパスの学生会を中心となって作成した「キャンパス紹介ビデオ」の放映が行われ、両キャンパスの様子を紹介しました。さらに、両キャンパスの吹奏楽部が協力し合った「合同演奏」も行われました。両部は、

限られた回数の練習期間にもかかわらず、見事な演奏を披露して式典を盛り上げました。

最後は、その吹奏楽部の伴奏で、校長・両副校長らがステージに立ち、全員で校歌を斉唱して式典の幕を閉じ、新高専の出発に心を新たにしました。

夕方には祝賀会も開かれ、合志市市長、八代市副市长をはじめ、県内外企業からの来賓、名譽教授・後援会役員等の本校関係者も多数出席して、盛大に開校を祝いました。



室山哲也氏の講演



全員での新「校歌」斉唱



祝賀会

開校記念式典に参加して

● 式典を終えて

熊本キャンパス 学生会会長
梶原 泰治

熊本電波高専ならびに八代高専の統合により「スーパー高専」、熊本高専が誕生しました。新学科は次世代をリードしていく技術者を育むためのカリキュラムが組まれ、新しく編成されています。更に高いレベルと質を併せ持つこのスーパー高専を旅立ち、これから何年何十年も技術の最新の現場で後輩達が活躍していくを考えると、とても胸が躍ります。加えて、私達自身もそのような高専生の一員となれたことを誇りに思います。その反面、最後の学年の前期まで熊本電波高専の学生として過ごしてきて、熊本電波高専を卒業できないことを心残りにも感じます。しかし、私達にはこれまで培ってきたものが残っています。それらを糧に卒業まで残された時間、熊本高専らしいスタイルを自分達が作っていくのだという気持ちで生活していきます。



● 初顔合わせ

八代キャンパス 学生会会長
池田 竜

10月16日県立劇場において、熊本高等専門学校が開校され初めて熊本・八代両キャンパスによる合同セレモニー開校記念式典が催されました。式典では、学生による両キャンパスの紹介ビデオが上映されました。学生が作成したビデオだったので両キャンパスのそれぞれ違った雰囲気が伝わってくるような内容で、とても楽しく見ることができました。私は八代キャンパスのビデオ作成に携わったのですが、熊本キャンパスの紹介ビデオがどのような感じに仕上がっているのか式典まで分からなかったので、とても楽しみにしていました。式典で初めて熊本キャンパスのビデオを見て、映像の綺麗さ、構成の完成度の高さに驚かされました。そんなビデオを作成できる熊本キャンパスの学生とこれから熊本高専としてお互い協力し称えあいどんな学校ができるか楽しみです。



● 紹介ビデオ作成

熊本キャンパス 放送広報委員会
末永 雄士

放送広報委員会では毎年、コンテストに映像作品などを展出しているのですが、今回は式典向けの紹介作品を引き受けました。作品では、学生の目線から見た学校をわかり易く紹介するために、「電波高専から熊本高専へ」という物語を取り込むことで、楽しみながら見て貰えるよう心がけました。また、短い尺に学校の風景を詰め込んで、学生を感じる電波高専（現熊本キャンパス）の雰囲気を皆さんに伝えられればという思いの下、スタッフ一丸となって制作に取り組みました。いざ上映となると反応が怖くて緊張していましたが、終了後喝采を頂き、本当に嬉しかったです。四ヶ月に渡る撮影と編集をこなしても疲れましたが、良い経験になりました。本当にありがとうございました。



● 開校記念式典に参加して

八代キャンパス 吹奏楽部
中川 史子

今回の記念式典での合同演奏は、完璧とはいませんが、学生らしい楽しい演奏ができ、よい経験になりました。



7月初旬から準備を進め、選曲等については熊本キャンパス吹奏楽部部長の川端さんと連絡を取り、両キャンパスの意見を交換し合いました。合同練習の回数が3回と少なく、時間も限られていましたがその分一回一回の練習を大切にすることができた。今回の合同演奏を通じて両キャンパス同士で互いに刺激し合い、得られたものはたくさんあります。せっかく同じ学校になったのだから私たち吹奏楽部だけでなく、いろんな場面で両キャンパスが合同で活動できる機会が増えるといいと思います。

校歌・校章等について

副校長 神田 一伸

10月に熊本県立劇場で挙行された熊本高等専門学校の記念式典で披露された、校章（シンボルマーク）と校歌の作成に当たったU Iワーキンググループ（WG）の一員として、その経緯について報告いたします。

2008年12月に発足したWGでは、先ずは「熊本高専」のイメージをどのように形成するのかについて検討を重ねました。その結果、下記のスケジュールで進めることで合意しました。



- ①全体としての「熊本高専」のイメージを掴むために、キャッチフレーズと校歌に入れたい言葉を公募する。
- ②キャッチフレーズの選考
- ③キャッチフレーズにマッチしたシンボルマークの公募
- ④公募により寄せられた「シンボルマーク」の選考
- ⑤校歌作詞・作曲者の検討
- ⑥校歌に入れたいフレーズを作詞者に渡して校歌の作詞を依頼
- ⑦校歌の選定
- ⑧作曲者への作曲依頼
- ⑩シンボルマークを用いた看板等の作成

10月1日の「熊本高専」誕生に間に合わせるということで、時間が限られていることもあり、当初はずいぶん心配しました。

それでも、キャッチフレーズの応募には110点が寄せられ、審査の結果、一森佑也君の「革新する技術、創造する未来～ものづくりをテクノする熊本高専～」と稻葉潤君の「創・造・力～夢へ翔ける熊本高専～」が選ばれ、この二つを組み合わせた「革新する技術、創造する未来～夢へ翔る熊本高専～」をキャッチフレーズとすることに決定しました。

シンボルマークの応募には、全国からプロのデザイナーも含めた119作品が寄せられ、厳正なる選考会を経て、井口靖久氏の作品が選ばれました（右ページに図）。この図案は熊本と

高専の頭文字「K」が躍動感あふれる図柄で表現されており、キャッチフレーズにもっともマッチしているとして多くの支持を得ました。

校歌の作詞は、熊本・八代の両地域だけでなく広く熊本という土地柄を熟知して、更に高専やそこで学ぶ学生に共感できる在熊の詩人ということで、藤子迅司良氏にお願いいたしました。出来上がってきました詩は、お願いするときに、「これまでの校歌の殻を打ち破る大らかな詩を」という要望に見事に応えてくださいました。一番は未来を目指す若者の夢へ翔る姿を表し、二番では、熊本という土地柄だけでなく、青春の学びやとしてのキャンパスで、きらめく、永遠の時間をはぐくんでもらいたいという希望が込められています。

詩が出来上がり、作曲はその作風と人柄を良く知っている作曲家ということで、石川和彦氏にお願いいたしました。藤子・石川両先生には、詩の内容だけでなく、打ち解けてお話しただけるよう、一日でしたが熊本と八代のキャンパス周辺を散策しながら、時間を取りていただきました。それから一月後にメロディが出来上りました。

石川先生にはご無理を承知で、プラス用と男声合唱用のアレンジもお願いいたしました。出来上がってきました曲は、藤子先生の詩を見事に生かしきった、ゆったりとした、大らかな中に情熱あふれる作品でした。

演奏上の注意もメールでいただき、「いつも変わらずに、押し付けではなく、当たり前のように、心地よく流れるそよ風となって、生徒を上へ上へと押し上げる学校関係者の磨きぬいた叡智と力をさりげない歌い出しの部分の分散和音で表し」、サビの部分では「学校の持つ力と情熱を込めたもの」というメッセージが寄せられています。

最後になりましたが、「熊本高専」のシンボルマークと校歌、これから長い歴史の波に耐えて、ますます輝きを増すことを願っています。多方面の方にご協力いただき本当に有難うございました。

校章とロゴ



熊本高等専門学校

キャッチ
フレーズ

革新する技術、創造する未来
～夢へ翔る 熊本高専～

熊本高等専門学校校歌

J=84

藤子遼司良 作詞
石川和彦 作曲

おぞらはるかはばたくようすきよ
おまなみとおくはとばくもうつに
ころのつばさをおおきくひろげいこゆうやをわた
うしづのまさとはおぼうのみらい
るか世にむかつてあはしたさくひばす
めをかたろううたかいりそがあ
るるしなやかないしがある
ああああああああ
ななびや

一、大空遙か
羽ばたくように
心の翼を
大きく広げ
荒野を渡る
風邪に向かつて
明日を目指す
夢を語ろう

高い理想がある
しなやかな意思がある
ああ豊かなる学び舎

生きる時代がある
きらめきのときがある
ああ永遠の学び舎

二、山脈遠く
飛ぶ雲映す
教室の窓は
希望の未来
校友情育む
校庭の四季
花咲く日々よ
青春の日よ

熊本高専の組織と運営

副校長 齊藤 郁雄

熊本高専は2つのキャンパスに6つの学科と2つの専攻を有する全国でも有数の規模を持つ高専として生まれ変わりました。ここでは、その組織の概要と運営の方法についてご説明したいと思います。



まず、新高専では校長の主導の下、熊本高専全体の管理運営を目的とした主要な委員会（総合運営会議他）が両キャンパスに跨って設置されています。こうした委員会では規則等の制定や改廃、将来計画の検討、教育課程や施設計画の基本方針の決定など熊本高専としての管理運営の重要事項を審議します。

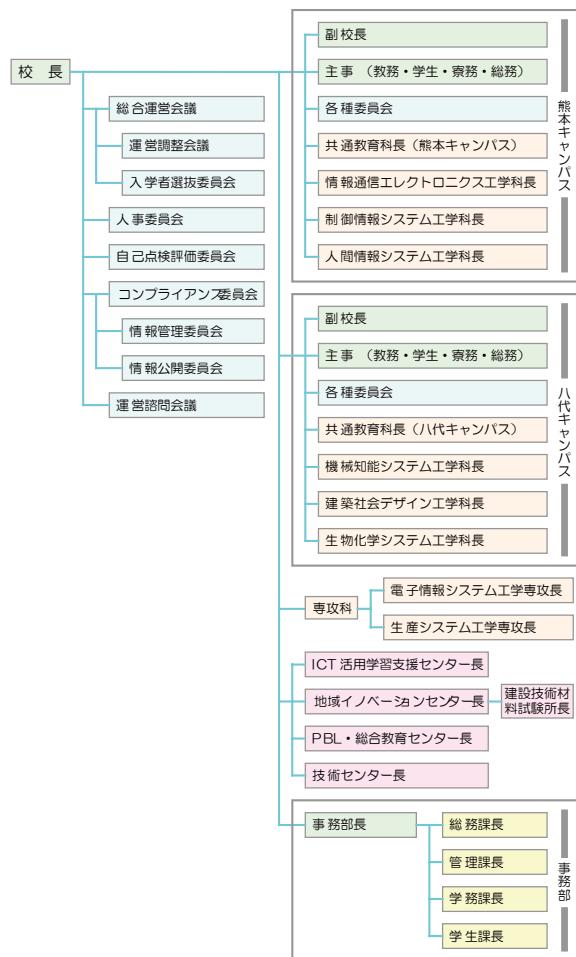
次に、各学科を含むそれぞれのキャンパスでは、校長の下、副校長、教務主事、学生主事、寮務主事、総務主事、共通教育科長、各学科長を中心として様々な委員会を設置し、日常的な運営を行います。両キャンパスに設置されている各委員会は、ほぼ同じ組織体系になっていますので、互いの情報を交換しながら、必要に応じて連携して活動を行います。

新設される3つのセンターも、両キャンパスに跨って設置されるもので、それぞれの教育・研究資産を活用しながら、教育の高度化や地域貢献の推進を図ります。

事務組織については、既に平成20年度から両キャンパスに跨る統一的な組織として活動していますが、業務の効率化とサービスの向上を目指してさらに組織改革を行う予定です。

この他、熊本高専を支える組織として、学生会や同窓会、後援会などがありますが、今のところ基本的にはキャンパスごとに活動することになっています。

このように、熊本高専の組織は両キャンパスに跨って統一的に活動する部分と、キャンパス毎に活動する部分とで構成されています。これは、「新高専はそれぞれのキャンパスの伝統や特徴を活かした学科構成や運営組織にする」という発足時の基本方針に基づくものです。残念ながら熊本高専の両キャンパスは直線距離でも



新高専の組織図

約50km離れており、1つの組織として活動する上では、難しい部分もあります。しかし、熊本高専が社会から評価され、その存在感を示していくためには、両キャンパスの特徴を最大限発揮しながら、新高専としての一体感を持って前進していくことが重要です。

技術的にも、TV会議システムやグループウェアを新規に導入するなど、改善を図っていますが、何よりも大事なのは我々教職員・学生・保護者の意識であると思います。すでに、学校組織としての各委員会の他、学生会、同窓会、後援会などさまざまな場面で、交流活動が始まっています。熊本高専の同じ仲間としての意識を持って、新高専の発展を共に目指したいと思います。

皆様よろしくお願ひいたします。

新高専の広報について

右のようなテレビ CMを見ましたか？

「熊本高専の誕生」を赤ちゃんの映像で表した5秒間だけのCMです。9月25日(金)から10月15日(木)まで、1日2回程度、やや異なるバージョンの3セットが連続したかたちで、「あ、テクノモーション。10月1日、熊本高専誕生！」というナレーションとともに流れています。

同様の赤ちゃんを使った広告は、10月1日付けの熊本日日新聞の朝刊にも、「全面広告」として掲載しました。

これらの広告では、三色カラーの「Branding Symbol：ブランド化するためのシンボル」も目になりました。この三色マークは、新高専の「Technology(技術：コバルト色)+ emotion(情熱：マゼンダ) = Technomotion(テクノモーション：技術で時代を動かす、スクールカラー)」というメッセージになっています。そしてこれは、シンボルマークの色指定も兼ねています。中学生向けのパンフレットや学校紹介のリーフレット、そして現在、新高専の案内板やホームページ等にも使われています。

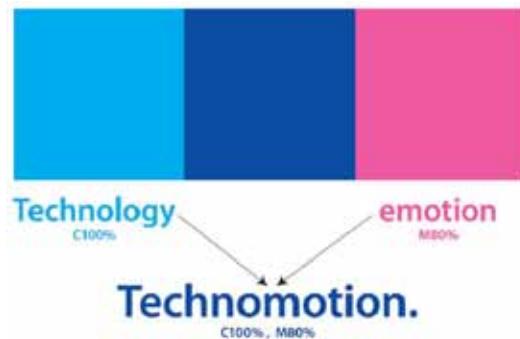
これらの広報企画は、新高専誕生を広く地域の方々に知ってもらうために、昨年末から、両キャンパス合同の「広報WG」を立上げて、計画・準備したものです。地元の広告専門会社の協力も得て、「新高専誕生！」というテーマを統一的に展開することを戦略に実施してきました。

みなさんの感想はどうだったでしょうか？

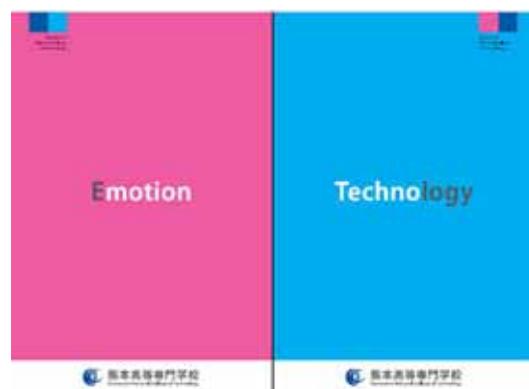
新聞広告
10/1 熊日新聞 朝刊



テレビ5秒CM (9/25～10/15放映)



ブランディングシンボル (三色カラー)



中学生向けパンフレット



熊本高専ホームページ
<http://www.kumamoto-nct.ac.jp/>

新高専スタートによせて（抱負とメッセージ）

● 情報通信エレクトロニクス工学科

学科長 松田 豊穣

情報通信とエレクトロニクス（電子工学）の技術は、高度情報化社会における基幹技術であり、これから発展及び成長が期待される技術分野です。情報通信とエレクトロニクスに対するニーズは、これからますます高度化・多様化することが予想され、これらの要請に応えられる技術者、またこの分野を先導する研究者が求められています。



このような背景のもと、熊本電波高専の情報通信工学科と電子工学科を母体として、情報通信エレクトロニクス工学科が誕生しました。新学科の特長は、情報通信とエレクトロニクスのそれぞれの専門技術とともに、両者が融合した技術及び情報通信エレクトロニクスを実際に活用する技術の教育に重点を置いています。そして、単なる知識の獲得だけではなく、技術をどのように社会に役立たせるかという視点を持つ技術者の育成を目指しています。

● 制御情報システム工学科

学科長 永田 正伸

制御情報システム工学科の学科長を仰せつかりました永田正伸と申します。よろしくお願い致します。



制御情報システム工学科は、旧熊本電波高専 電子制御工学科のカリキュラムの機軸である電子制御技術をベースにして、電子制御技術・情報技術を駆使する実践的ロボティクス技術を習得することを目的として再編され、制御工学や信号処理、ソフトウェア技術を基礎として、マイクロコンピュータ技術・組込みシステム技術などの応用技術を身に付け、これらの統合システムの設計・開発能力を持った実践的技術者の育成を目指しています。

新年度より2名の新任の先生を迎え、装いも新たに新学科教員一同精一杯取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い致します。

● 人間情報システム工学科

学科長 小山 善文

人間情報システム工学科は、コンピュータサイエンスと人間環境技術を融合した「社会基盤や人の生活に役立つ情報システムづくり」を目標に、人にやさしく、暮らしを豊かにする情報システムの研究と、様々な社会分野で活躍できる感性豊かな情報システム技術者の育成を行う学科です。



学生は、情報技術、感性工学、人間支援工学、コンピュータ、ソフトウェア、メディア工学などを学び、情報システムづくりやソフトプログラミングなどにチャレンジできます。人を中心とした情報化や環境技術、感性など21世紀に必要とされる創造豊かな人材の育成を目指していきます。

● 共通教育科（熊本キャンパス）

科長 八田 茂樹

人間にはスペシャリストのタイプとジェネラリストのタイプがある。日本人は「この道まっすぐら」というような一つの道に秀でた人つまりスペシャリストを好む。しかし一つ目立つものはないが、まんべんなく対応できるといった風な人もいる。そういう人は能力がないのではなく、全般的に平均的な能力があるのだ。いわゆるジェネラリストである。理系科目に秀でないと高専では、やりにくいが、社会ではジェネラリストとして評価されるかも分からぬ。高専で理系科目が得意な学生諸君も、めげずに地道に勉強して、自分の中の文系的要素を大事にし、バランスのとれた社会人・企業人になってほしい。以上、理系の基礎科目としての共通科目だけでなく、教養科目としての共通教育科の立場を説明した次第である。



● 機械知能システム工学科

学科長 河崎 功三

多くの仕事場で効率化、高度化、グローバル化が進行しています。この変化に係わったのが生産の自動化と世界に情報伝達を可能にしたインターネットです。製造部門では受注はインターネットで世界から来ると同時に、世界の他社が競争相手となっています。また、製品を創る場合、社会・環境に与える影響を考慮する事が求められています。リサイクル、CO₂削減です。難しい世の中になったものです。しかし、これは能力を持った技術者の需要が高まっている事を意味し、チャンスです。この変化に対応可能な能力を持った学生の育成を目指し、新しく機械知能システム工学科を創りました。新学科は足を旧学科が基礎としていた機械にしっかりと着け、手を情報・制御・通信等に伸ばす、社会変化に対応可能な学科です。手の先には全地球が我々をきっと待っています。



● 生物化学システム工学科

学科長 木幡 進

▼食品・化学製品・医薬品・環境・情報電子などの産業界は、従来、それぞれの分野で開発された“モノづくり技術”に支えられて進展し、旧生物工学科の高専卒業生はそれらの産業界で生産技術の仕事に携わり活躍してきました。▼しかし、最新の生産技術は、異種の工学分野を融合し、それらを蜘蛛の巣状につないで創られた“先進的で高度なモノづくりシステム”へ移行しています。特に、ICT・情報電子技術を基盤とする計測・制御技術、マイクロ・ナノ技術、イメージング技術等はシステムの構築に不可欠です。▼新学科では、卒業生が上記の産業界における新時代の技術システムへ対応して意思疎通できるように、「バイオ技術」と「情報電子技術」とを融合・複合した分野を設け、より Step Up した「ICT に強い生物・化学技術者」の育成をめざしています。



● 建築社会デザイン工学科

学科長 大河内 康正

未来志向の新学科が誕生しました。建築社会デザイン工学科は、旧土木建築工学科の目標に加え、現代の進んだソフトな情報化社会への対応も視野に入れました。社会の高度情報化とともに建築や社会環境のデザイン・整備の在り方も変化しています。現代の私たちは、未来の快適な生活環境のデザインと持続可能な自然環境の保護がともに求められています。本学科は、現代の人々の住む社会と豊かな自然を守り、地域の文化や歴史、自然環境、防災などに配慮しながら、情報システムやコンピューター技術を活用して、何よりも人々のシアワセのために、建物、道路橋などを作り、地域づくり、まちづくりなどを行う、そんな技術者の育成を目指しています。



● 共通教育科（八代キャンパス）

科長 五十川 読

本年 10月よりスタートした熊本高専八代キャンパスには、「機械知能システム工学科」、「建築社会デザイン工学科」、「生物化学システム工学科」の融合・複合系の 3 学科が配置されており、そのなかで共通教育科は各専門学科の基礎となる部分を担っております。



その人員構成は、英語・数学・国語・理科・社会・体育等のいわゆる一般科目担当者の他に、近年益々その重要性が高まっている ICT (コンピューターを中心とする情報・通信関連技術) 系の科目担当者を擁し、ICT 関連科目を 3 学科共通の基礎と位置づけていることが特徴です。

本校に入学した学生がその才能を開花させ、本校の理念にある「技術者としての人間力を備えた、国際的にも通用する実践的・創造的な技術者」を一人ひとり実現することが私たちの願いであり、原点でもあります。この原点に向けて、スタッフ一同一致協力してまいりたいと思います。

ICT活用学習支援センター**センター長　米沢　徹也**

長年両キャンパスにおいて情報処理の教育・研究の要として活動してきました両センターと図書館が統合され、10月1日に熊本高専ICT活用学習支援センターとして新しく誕生しました。既存の施設・設備を利用しますが、予算が認められた場合には、両キャンパスの施設・設備が一部改修、更新される予定です。統合に先立ち今年の5月には両キャンパス間は100Mbps回線で接続され、1つのLANで構成されています。また、外部接続線も高速化され、老朽化したネットワーク機器も更新されています。統合までは熊本電波高専と八代高専としてそれぞれにICT業務を行ってきましたが、これからはそれぞれのキャンパスの特徴を生かしながらICT基盤の整備、ICTによる教育・研究・地域連携活動の支援、それから図書・学術情報の収集、活用、管理の業務を行っていくことになります。これからもICT活用学習支援センターの有効活用をお願いいたします。

**地域イノベーションセンター****副センター長　福田　泉**

当センターは地域産業界や社会との積極的な連携をめざし、次に掲げる業務を行います。(1) 地域イノベーションの推進に関する事項、(2) 共同研究プロジェクト等、研究・技術開発連携の企画・推進に関する事項、(3) 社会人講座等、地域の人才培养の企画・推進に関する事項、(4) 九州・沖縄地区拠点活動を含む知的財産活動活性化等の企画・推進に関する事項、(5) その他地域との連携推進に関する事項。以上のセンター業務を円滑に推進するために、(1) 地域創発事業部、(2) 研究開発推進事業部、(3) 人才培养事業部、(4) 知的財産拠点化事業部の4事業部を設けています。本年度の主な事業としては、熊本高専発ワークショップ～イノベーションをリードする～「強い特許」の創出と活用を目指して(12月15日)、第1回熊本高専地域イノベーションセンターシンポジウム～環境、グリーンIT!～(H22年1月予定)、等が企画されています。

**PBL・総合教育センター****センター長　松本　勉**

PBLはProblem Based Learning、Project Based Learningという言葉の略称で、問題解決型学習、課題解決型学習と呼ばれています。これまでの知識一辺倒の学習法から現実世界に密着した問題や課題について自ら解を作り出していく学習方法です。この特徴は問題・課題解決能力が身に付くばかりではなく、新しい知識の獲得方法についても体得していき、今日の産業界がエンジニアに求めているものです。本センターはPBL方式を具体的な講義や実験への取り込む手法について高専の教職員や小中学校の教諭へ講習会などを通して広めて行きます。



キャリア教育として学生諸君が主体的に自己の進路を選択・決定でき、社会人・職業人として自立していくようにする教育を推進していきます。本センターは小中学生を主な対象とした科学技術教育支援も担当し、理科離れが激しい子供達に科学技術の素晴らしさと楽しさを理解して貰う活動を行っています。最後に、本センターは国際化教育も推進していきます。高専機構や本校が教育目標として掲げている「国際的に通用する技術者の育成」について、海外研修旅行、英語研修、外国人講師による英語での授業、英語による教材など具体的に活動を展開しています。

● 専攻科より

専攻科長 木場 信一郎

2009年度10月に熊本高等専門学校が設置され、同時に新専攻科が置かれました。熊本キャンパスと八代キャンパスともに1専攻ずつとなりましたが、学生数はそれぞれ1.5倍に拡充されました。新専攻の機能は、新専攻科及び専攻の設置の概要・目的から引用すると以下のようになるかと思います。



「新専攻科は、電子情報通信とバイオなどの他分野との融合領域の技術者育成を目指すICT応用に強い電子情報システム専攻とICTを核しながら生産システムで融合を狙う生産システム工学専攻を新設している。この2専攻は、熊本高専における高度化の先鋒として機能することにより、変革に適応できるさらに実践的な融合的研究開発力と国際性・社会性・これらに派生する問題解決力により、イノベーションを担うことのできる高度開発型技術者の育成に適応した専攻科を構成する。」

ここで示されるイノベーションは、単に従来技術の改善による進展ではなく、科学の成果を基にした技術力を基盤とした創成による変化を意味しているものと理解しています。新専攻科のスタートに当たり、その創成を担う人材を育成する専攻科へ展開させていくための戦略的な充実と拡充へむけて踏み出したことになります。

● 事務部より

事務部長 山代 文雄

平成21年10月1日の高度化再編整備にあわせて事務部を再編し、技術センターを設置しました。



1. 事務部の再編について

八代キャンパスでは、学生第一課を学務課に名称変更し、学務課に企画係を新設し、主に入試業務を担当することとしました。

又、熊本キャンパスでは、学生第二課を学生課に名称変更し担当を係に名称変更しました。

今回の事務部再編は業務に支障がないようにゆるやかな再編としており、将来的には総務業務を八代キャンパスに厚く、会計業務を熊本キャンパスに厚くする方向で、業務の見直し、改善合理化をすすめながら検討していくこととしています。

2. 技術センターの設置について

技術センターは、技術に関する専門的業務を組織的かつ効率的に行うとともに、その職務遂行に必要な能力、資質等の向上を図り、もって熊本高等専門学校の教育・研究、地域の教育機関及び民間企業における技術支援の進展に資することを目的として設置しました。

校長のもとにセンター長、副センター長を置きます。そして、キャンパス毎に技術センター長を置き、その指揮命令のもと上記の目的に沿って活動していく事にしております。

厳しい行財政改革の中、皆で力をあわせて前進していきます。教職員、学生、地域の皆様のご理解とご支援、ご協力をこれからもよろしくお願いします。

銘板除幕式の様子
10月1日(木)



熊本キャンパス（左）
八代キャンパス（右）



● 4年生見学旅行

情報通信工学科 学科長 大田 一郎

平成 21 年 10 月 4 日～8 日の 5 日間で情報通信工学科 4 年生はシンガポールとマレーシアの見学旅行を行い、保護者の皆様や学生の協力のもと無事終了することができました。旅行中に新型インフルエンザが発症したため、残念ながら旅行最終日の市内見学はキャンセルしましたが、本旅行のメインであるソニーシンガポールの工場見学とセマテク・ポリテクニックとの交流会は、計画通り行うことができました。工場見学では製造現場の最新鋭の設備や技術に直接触れることができ、また、昼食までご馳走になり、現地スタッフとの交流で会社の雰囲気を身近に感じることができました。



本学科では本年度からテーマセク・ポリテクニックとの交流会を実施することにしました。交流会は、学生による互いの学校紹介に始まり、自己紹介やアトラクション、ティーブレイク、プレゼント交換、スポーツレクレーションなど時間が足りないぐらい盛り上りました。また、旅行終了後、交流会について英語でのプレゼンテーションを実施しました。学生のアンケートの結果も好評で、英語の勉強、海外留学、海外勤務の企業への就職などの動機付けになった、思い出に残る見学旅行が実施できました。

● 韓国研修旅行を終えて

電子工学科 4年 長田 大和

アニヨハセヨー！！(こんにちは)
私たち電子工学科 4 年生は 10 月 19 日～23 日までの 5 日間、研修旅行に行ってきました。今回の研修先は韓国でした。研修を通して、文化の違いや韓国の制度などを体験することができました。またクラスメートで、はしゃいだり、屋台に行ったりと、とてもいい経験になりました。これから的生活もこの体験を有意義に生かし、高専生活を楽しく過ごして生きたいです。



右の写真は、UBIQUITOUS DREAM 展示館で撮った写真です。この施設では、コンピュータより誰でも直感的に操作することができるシステムを体験することができました。

● シンガポール研修旅行

電子制御工学科 学科長 永田 正伸

電子制御工学科のシンガポール研修旅行は、英語研修・ものづくりキャンプも含めると 14 泊 16 日の日程で実施され、短期留学とも呼べる充実した内容でした。英語研修では英会話によるコミュニケーション力を、ものづくりキャンプでは Java のプログラミングスキルを伸ばすことができました。その他にも、Panasonic、Kenwood の工場見学、



ものづくりキャンプ

Nanyang Technological University・Temasek Polytechnic・熊本高専の 3 校学生交流会、TP 研究室見学、学生交流、セントーサ島での自主研修、數え上げればきりがありません。研修中は Temasek Polytechnic の学生達と自身の濃い交流ができ、多くの友人を作ることができました。



英語研修

● 学科近況

情報工学科 学科長 村上 純

まず5年生の進路内定先については、20名が進学（内未定4）、23名が就職（内公務員希望1）となっています。進学先は、本校専攻科8名、筑波大1名、九州工大2名、熊本大1名、豊橋技科大2名などです。就職は、ソフト開発関係が主ですが、保守・サービスや電力などにも決まっています。地域は関東と九州が各約半数のほか大阪2名です。就職戦線の厳しさが報じられていますが、本学科でも私が担当になって以来最も厳しい状況で、約1/3が第1希望先に失敗しました。中には、進学に切り替えた学生もいます。来年度の求人も既に始まっていますが、厳しい状況は続くものと思われます。



4年生の見学旅行は、担任の神崎先生ほかの引率で、シンガポールに行きました。これまでに交流・見学の実績があるテーマセク・ポリテクニックのIITスクール、NEWater、シンガポールヤクルトなど、行く先々で歓待を受け、学生の英会話力向上や国際感覚涵養に大いに役立つ有意義なものとなりました。新型インフルエンザ対策の懸念がありましたが、1つの事故も、病気も発生せず、学生の意識や能力の高さに改めて気づかされた旅行でした。

● 今年の就職・進学の状況について

機械電気工学科 5年担任 入江博樹

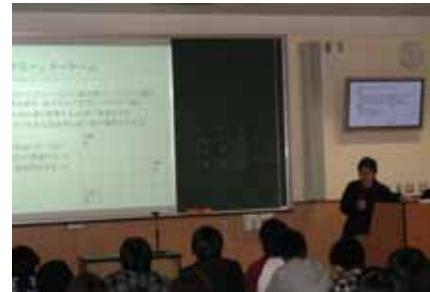
11月の時点で機械電気工学科5年の全員が希望通りの就職先と進学先を決める事ができました。今年度の就職戦線は厳しい状況があることが予想されていました。案の定、新聞は10月末の時点でも30%近くの大学生の就職が決まっていないことを報じました。このような中、4月からの2ヶ月間に集中した就職試験を無事に乗り切る事ができました。これまで進路支援室の支援を受けたインターンシップや企業説明会を通して企業研究と自己分析を進めてきました。4年の後半には自分の進路を強く意識するようになっており、志望動機がはっきりした点が勝因だと思います。また、専攻科への進学者も12名と増えた点もうれしく思います。活動を通して担任が感じたことは、未曾有の就職難は企業もより良い人材の確保に苦労している点です。企業は、学歴よりも学習歴、それも中学時代から培って来た「人間力」の高い人材を求めています。理科離れて工学部の偏差値が下がる中、大卒／大学院よりも高専卒の採用に動いたようです。企業の思惑と高専の人材がマッチしたのだと考えています。今後も高専の学生とOB/OGの活躍に期待しています。



● 最近の進路状況

情報電子学科 学科長 森内 勉

最近5年間の進路状況をみると、就職求人数は平成17年度の369件から増加し、20年度の642件と、バブル全盛時の数まで伸びた。21年度は、米国を中心とした金融危機の煽りを受けて前年度より200件減少した。過去5年間で73%の学生が就職を希望し就職率100%を達成した。学生にとって、このような高い求人倍率があった反面、採用側から求められる資質や能力の基準が毎年高くなっているように思える。就職先は九州地域が49%、関東地域が33%、その他が18%であった。バブル景気の頃と比べると九州地域にICT関連企業の開発設計分野の業種が増えてきたことが伺える。



進学者の割合は27%と変わらない割合の中で、専攻科へ入学する割合が増えた。現在、多くの専攻科生は就職志望であり、学士の資格と共に、より希望にかなった就職先を求める傾向がみられる。右は11月の5年生の課題研究「中間発表会」の様子である。

● 防災をテーマに集う

土木建築工学科 4年担任 藤野 和徳

平成21年度の4年生の工場見学旅行は防災を主テーマに、野島断層保存館を始め、兵庫県耐震工学研究センター、東京臨海広域防災館などを見学した。高専祭が終わった11月11日に熊本高専の「地域社会との共同教育」と岐阜(石川)高専の「被災地復興支援をとおしての産学官民の連携教育」、これらの「現代GP」が縁で岐阜高専の4年生が見学旅行先として、日奈久を訪れ交流会が催された。交流会では、熊本高専の見学旅行先、岐阜高専4年生による防災をテーマとした文化祭の取り組み、熊本高専5年生の日奈久における非常時の退避行動、岐阜高専から能登半島地震被災地復興支援の取り組みが、日奈久断層が通っている日奈久で紹介された。改めて、安心・安全を守る生活、地域活性化のための連携の重要性が浮き彫りとなった。防災を含めた社会基盤整備には地域住民の参加が必要であり、土木建築工学科(建築社会デザイン工学科)の果たす役割・責任は大きいと痛感する。



● インターンシップを終えて

生物工学科 4年 古里 寿美男

私は株式会社カネカ高砂工業所の医薬品二課で研修を行いました。医薬品二課では微生物を利用した医薬品中間体の製造を行っています。

実習はほとんどのプラントがオーバーホール中で停止していたため、見学が中心となりました。しかし、普段見ることのできない機器の内部まで見ることが出来たので貴重な体験ができたと思います。また、製造工程中の報告が行われる定例会議にも出席させていただいたので、現場の雰囲気も十分に感じ取ることができました。

インターンシップを終えて、今後の高専生活でやるべきことが自分なりに見えるようになりました。それは、英語と化学工学の学習、そして危険物取扱者の資格取得です。英語は苦手教科なのですが、絶対に必要だと言われましたし、化学工場で働く上では化学工学の知識と危険物の資格は必須だと思いました。今回のインターンシップはこれからの指針を得ることができたため、非常に有意義なものになりました。



既設学科の教育課程と卒業等について

新高専開校に伴い、平成22年度から新学科への入学生を受け入れ、年次進行で移行していくことになります。既設学科に所属する学生に対しては、卒業するまで現在の教育課程が維持されます。規則上は、新高専にそれぞれ旧高専の既設学科が置かれ、在学する学生に対して必要な教育が行われ、在学する学生が全員卒業するまで既設学科が存続します。在学生に対する卒業証書および卒業証明書は、「旧高専の既設学科の所定の課程を修めて、新高専を卒業した」ことを認めるあるいは証明する内容となります。

一方、既設学科に所属する学生が、原級留置となり、年次進行に伴う既設学科の教育課程を正規に履修できない場合には、学生に対して不利益が生じないように処置することを大前提として、以下のような措置をとります。

原級留置の場合、既設学科と関連の度合が大きい新学科のクラスで教育課程を履修することを原則とし、新学科の教育課程と教科目的内容等が同じ科目は既設学科教育課程の科目と読み替えて単位認定します。既設学科の教育課程で新学科の教育課程がない科目については、新学科クラスとは別に開講して履修することにします。このような措置により、既設学科の卒業を保障しますので、在学生の諸君は安心して学業に取組んで下さい。

今後も、熊本高専として教育の成果が上がるよう配慮していきます。学生諸君をはじめ関係の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

両キャンパス教務委員会

電波祭で POP NOW!

実行委員長 堀田 将伸

10月31日と11月1日の2日間。「今年もやつちやいました、電波祭」第8回目となる今回は、ハロウィンとのコラボレーションを果たし、テーマである「POP NOW! !」に相応しい“はじめっぷり”で無事に終了することができました。

思えば新高専への再編、耐震化工事に伴う校舎棟改修に始まり、新型インフルエンザの流行などいくつかの困難が目の前に立ちはだかりましたが、その度に意見を出し合って解決策を模索しました。

10月になると毎日夜遅くまで活動する部門も出てきて、皆疲労の色も隠せなくなりました。しかし、そこは若さ！生き生きと、そして着々と準備を進めてきました。全ては「成功」という2文字を全員で勝ち取るためです。

そうして迎えた電波祭当日。制限されたスペースの中で、体育館一面を使った「実験戦隊タイケンジャー」を筆頭に模擬店No.1を決定する「模擬店王者モギキング」、電波祭の華となる「ステージ企画」、クラス一丸となって取り組んだ「デンヌ映画祭」と、様々なイベントを行いました。その甲斐もあって、1日目にはなんと1000人を超える来場者を迎えることができました。これは例年と比較すると130%という喜ばしい数字であります。あいにく2日目は雨天となり屋外企画は中止しましたが、それでも500人以上の方々に来ていただきました。今までにない課題を乗り越えて第8回の電波祭実行委員長を務めることができて本当によかったです。あの達成感は何にも代え難い瞬間でした。後輩達との出会いは青春の宝であり、この経験は今後の心の糧となることでしょう。

最後になりましたが、ご来場いただいた皆様方、電波祭を盛り上げてくれた学生の皆さん、指導・協力していただいた教職員の皆様方。そして何より実行委員長についてくれた実行委員の皆さんへ多大なる感謝の気持ちを込めて。ありがとうございます！！みんな、愛してる！！



高専祭「START」

実行委員長 竹井 聖土郎

11月の6、7、8、9日の4日間にわたり高専祭が行われました。6日に前夜祭、7・8日に本祭、9日に体育的イベントというスケジュールで進めていきました。今年の高専祭のテーマが「START」ということで、このテーマには、八代高専としての高専祭に区切りをつけ、熊本高専八代キャンパスとしての高専祭の「START」という願いを込めました。5月に高専祭実行委員を立ち上げ、高専祭に向けて実行委員一丸となって、最高の高専祭が出来たと思います。

<前夜祭> お菓子投げ、高専生の主張、ミニ四駆などの企画がありました。どの企画も盛りあがり、また、ピロティでは学生会が毎年恒例のおでんを販売していて、とてもおいしく大盛況でした。

<本祭> 本祭は、2日間あり、ステージではそれぞれ10個のステージ企画を行い、運動場や第二グラウンドでサブ企画を11個行いました。今年の高専祭は、第一回ということで、新企画も何個か計画し行いました。その中でも、特にコスプレコンテストは大きな盛り上がりで生徒にも、一般の方々にも大盛況でした。また、並木道の通りでは各部活動がパフェや、カレー、焼きそば、たいやきなど様々なものを売っていて、とても賑わっていました。一般の来校者の方々も多く、今までにないくらいの楽しい、素晴らしい本祭になったと思います。

<体育的イベント> 雨が心配された体育的イベントですが、無事に晴れて、行うことができました。

各クラスが、サッカー、野球、バスケ、バレー、ドッヂボールに分かれ、それぞれの球技で死闘を繰り広げました。また学科対抗リレーでは、選抜された人々が必死でバトンをつなぎ、学科の名誉をかけて、走っていました。



● 全国大会制覇

ハンドボール部（八代） 石川 輝一

今年度の全国高専大会は、私たちにとって負けられない理由がありました。1つは、皆が昨年の雪辱を晴らしたいという気持ちを持っていたことです。昨年は後一歩のことでの及ばず、悔し涙を流すこととなつたため、今年は部全体がリベンジに燃えていたようになります。また、今回の大会は再編統合以前であったため、「八代高専」の名前を残すことができる最後のチャンスだったということです。「八代高専」としての有終の美を飾ることができたのは本当によかったです。さらに、この大会が地元八代で行われたことです。プレッシャーを感じたこともましたが、保護者の方々、OB、友人など多くの人たちが応援に駆けつけてください、たくさんのエールを受けて戦うことができ、部員全員が限界以上の力を発揮することができたと思います。最後に、この結果は私たちだけの力ではなく、応援・補助を行ってくれた高専生、部員を陰で支えてくださった保護者の方々、そして顧問の先生方のおかげだと思います。本当にありがとうございました。また、新チームにはぜひ2連覇を狙ってがんばってほしいと思います。



● 全国大会優勝

水泳部（八代） 桑鶴 雄平

今年の全国高専大会水泳競技は、8月23日に宮崎で開催されました。私たち水泳部は過去最多となる15名で出場し、団体3位という好成績を収めることができました。一昨年、昨年とも全国高専大会では団体4位と悔しい思いをしただけあり、今年は3位入賞することが出来てとても嬉しかったです。



また、個人種目でも、男子は400mメドレーリレーが大会新記録で3位入賞し、私は100m、200m背泳ぎを大会新記録で優勝しました。女子では、池上史織さん（3年）が50m背泳ぎで2位、100m自由形では3位に入賞し、100m平泳ぎでは高野恵里奈さん（1年）が優勝、桑鶴美和さん（5年）が2位入賞するなど、大いに盛り上がる大会になりました。

● 全国大会準優勝

柔道部（熊本） 寺田 晋也（指導教員）

平成21年8月23日（日）に別府市で開催された第44回全国高等専門学校体育大会柔道競技の男子90kg超級で 村口 亮



君（電子制御工学科4年）が準優勝しました。昨年度の全国高専体育大会は3位でしたが、今年は、準決勝まで一本勝ちで決勝のコマまで進み、決勝戦では果敢に攻め善戦しましたが、惜敗してしまいました。

村口本人は、「試合では、攻めの姿勢がいい結果を残すことができました。頑張って来年こそ優勝したいです。」と意気込んでいます。

● 「特別賞」受賞

プロコン部（熊本） 島川 学（指導教員）

第20回全国高専プログラミングコンテスト（通称プロコン）の本選が、かずさアカデミアホール（千葉県木更津市）を会場として10月17日（土）、18日（日）の2日間の日程で開催され、熊本キャンパスの情報工学科のチームが課題部門に出場しました。課題部門には「ゆとりを生みだすコンピュータ」というテーマがあり、本校からの作品は幼稚園の送迎バスに関するシステムで、バスが保護者の待つバス停に到着する前にタイミングよく保護者の携帯電話にメールを送信する、というものでした。プレゼンテーション、デモ、マニュアルの審査があり、審査員の先生方から良い評価を得ることができ、課題部門の「特別賞」を受賞しました。さらに、問題提起、ニーズ分析、システムの発展性が高く評価され、協賛企業から「富士通特別賞」も頂くことができました。今年5月から作品作りに取りかかり、夏休みを返上して頑張ってきた学生たちの努力が報われたようです。



● 「特別賞」受賞

ロボコン部（熊本） 高倉健一郎（指導教員）

全国高等専門学校ロボットコンテスト2009九州・沖縄地区大会が、平成21年11月1日に沖縄県の21世紀の森体育館で開催されました。成績は次の通りでした。

八代キャンパス「B' 2」	・・・	初戦敗退
「天使の歌」	・・・	初戦敗退
熊本キャンパス「Andante」	・・・	初戦敗退
「GAMADAS」	・・・	準決勝進出



両キャンパスとも、惜しくも全国大会出場は逃しましたが、熊本キャンパスの「GAMADAS」（写真）は準々決勝で敗れてしましましたが、歩幅の広い歩行機構を認められ、東京エレクトロンFE株式会社より特別賞を獲得し、来年へ期待をつなげる結果でした。来年度は、5年生不在、4年生も研修旅行やインターンシップで製作期間が限られます。来年度の大会では主力メンバーとなる1・2年生部員も、各人のスキルアップのために毎日技術習得に励んでいます。

学生会トピックス

学生会は学校の教育指導方針に基づき、学生の健全なる活動を通して、人間形成を助長することを目的としています。「学校生活を楽しく豊かで、規律正しいものにし、よい校風をつくる」、「学生会の活動に参加して協調性を育成し、民主的に行動する態度を養う」等の目標を持っています。

統合後も、両キャンパスの学生会はそれぞれ独立して維持され、両キャンパスの学生委員会がそれぞれの学生会にきめ細かい指導をしています。先日の開講記念式典で放映された、両キャンパスの学生会によるキャンパス紹介ビデオでは、それぞれのキャンパスの特色・雰囲気が出ており、合同の吹奏楽演奏でも息の合ったところを見せていました。また、その後それぞれ行われた学園祭は、例年と同様、学生会・実行委員会主体で無事実行されております。

これまで、両キャンパスの学生会役員が会合する機会は年一回の交流会程度でしたが、同じ高専となつたことで、今後はより積極的な交流の機会が増えてくるものと思われます。

両キャンパス学生委員会

高専大会等成績一覧（熊本キャンパス）

平成 21 年度 全国高等専門学校体育大会

競技	種目	順位	選手氏名
柔道	90kg 超級	2 位	村口 亮(4C)

平成 21 年度 九州沖縄地区高専体育大会

競技	種目	順位	選手氏名
ソフトテニス	男子団体	3 位	
陸上	走幅跳	2 位	金子 貴博 (4E)
ハンドボール	男子団体	3 位	
柔道	男子団体	2 位	
	90kg 超級	優勝	村口 亮 (4C)
剣道	男子個人	3 位	坂本 拓郎 (4E)
ラグビー	男子団体	3 位	



ソフトテニス団体 3 位



柔道個人優勝・団体 2 位

第 31 回 全国高等専門学校通信弓道大会

種目	順位	選手氏名
男子団体の部	優勝	
男子個人の部	優勝 2 位	船崎 優 (5E) 杉本 優 (3I)
女子個人の部	3 位	池田 佳織 (3E)



ハンドボール団体 3 位



剣道競技個人 3 位

高専大会等成績一覧（八代キャンパス）

平成 21 年度 全国高等専門学校体育大会

競技	種目	順位	選手氏名
バドミントン	女子シングルス	2位	山口 祐佳 (4C)
陸上	男子 5000m	2位	谷 亮輔 (4M)
ハンドボール		優勝	
水泳	団体	3位	
	男子 100m 背泳ぎ	優勝	桑鶴 雄平 (3M)
	男子 200m 背泳ぎ	優勝	桑鶴 雄平 (3M)
	男子 400m メドレーリレー	3位	桑鶴 雄平 (3M)
			松浦 竜弥 (4M)
			山本 崇弘 (5E)
	女子 100m 自由形	3位	池上 史織 (3E)
	女子 50m 背泳ぎ	2位	池上 史織 (3E)
	女子 100m 平泳ぎ	優勝	高野恵理奈 (1E)
	女子 100m 平泳ぎ	2位	桑鶴 美和 (5E)

第 31 回 九州地区高専 少林寺拳法大会

部門	賞	選手氏名
単独演武（段外者）	最優秀	西村 知紘 (2E)
組演武（段外者）	最優秀	村坂 貴史 (2M)
	最優秀	益本 幸人 (2B)
団体演武（有段者）	優秀	
（段外者）	最優秀	

第 38 回 西日本地区高等専門学校 弓道大会

競技	順位	選手氏名
男子 個人	優勝	小原 礼 (1C)
女子 団体	3位	

第 42 回九州沖縄地区国立工業高等専門学校 英語弁論大会

競技	順位	選手氏名
レシテーションの部	優勝	岩本 舞 (2E)

平成 21 年度 九州沖縄地区高専体育大会

競技	種目	順位	選手氏名
ソフトテニス	男子 団体	2位	
	男子 個人	3位	宇藤 輝 (4C) 坂川 大介 (5C)
バドミントン	男子ダブルス	3位	井上 智貴 (5B) 中村 吉孝 (2E)
	女子 団体	優勝	
	女子シングルス	2位	吉田あゆみ (3C)
	女子ダブルス	優勝	楠本 香純 (5B) 山口 祐佳 (4C)
	男子 200m 自由形	2位	塚本 翔平 (5B)
水泳	3位	小林 竜大 (2E)	
	男子 100m 背泳ぎ	優勝	桑鶴 雄平 (3M)
	男子 200m 背泳ぎ	優勝	桑鶴 雄平 (3M)
	男子 100m バタフライ	優勝	山本 崇弘 (5E)
	男子 200m バタフライ	2位	山本 崇弘 (5E)
	男子 400m リレー	2位	
	男子 400m メドレーリレー	優勝	
	女子 100m 自由形	2位	池上 史織 (3E)
	女子 50m 背泳ぎ	2位	池上 史織 (3E)
	女子 100m 平泳ぎ	優勝	高野恵理奈 (1E)
ハンドボール	2位	桑鶴 美和 (5E)	
	3位	桑鶴 美和 (5E)	
卓球	女子 団体	2位	
	女子ダブルス	3位	作増七穂子 (3E) 満口 樹里 (3B)
剣道	男子 団体	3位	
	女子 個人	2位	長瀬ゆき子 (5C)
柔道	90kg 超級	3位	徳永 亮 (4C)
	60kg 以下	3位	森中 海 (3E)
	90kg 以下	3位	井手上高大 (5M)
	3位	岩岡 廉樹 (2M)	
バスケットボール	女子	3位	
陸上	男子 5000m	3位	谷 亮輔 (4M)
	男子三段跳び	2位	木水宏次朗 (5B)

後援会だより

● 後援会だより

熊本キャンパス会長 境 町子

後援会行事等につきましては、平素から格別のご協力を賜り、深く感謝いたしております。

さて、平成 21 年度上期の行事は、4 月 24 日の春季役員会及び定時総会におきまして、決算報告・事業計画の承認が行われ、学校より現状報告がありました。アンケートに基づく要望書を 5 月 27 日の役員会にて作成し、学校へ検討課題の報告等行いました。今後も、定時総会時のアンケートのみならず、各クラスで計画されます学級の自主活動（懇親会等）によるさまざまご意見を伺い、学校教育に側面的な援助活動をしていきたいと考えております。



本年度の 10 月 1 日には八代高専との統合により熊本高等専門学校へ変わりました。事前に双方の代表役員による懇談会で、各キャンパス単位で運営しつつ、検討を続けることで合意しています。9 月 4 日の役員会では、統合に伴うクラブユニホームの援助金につき審議を行い、課外活動助成金の取り崩しによる援助を決定しました。

なお、10 月 16 日の開校記念式典へは会長・副会長が出席しました。今後の予定としまして、11 月 25 日に秋季役員会、2 月中旬に八代キャンパスとの打ち合わせ、3 月 9 日に後援会主催による卒業・終了記念パーティの開催を計画しています。

学校教育支援という目標達成をめざし変動の多い時期ですが、今後ともご協力を宜しくお願いします。

● 新たな歴史を刻む「熊本高専」と共に

八代キャンパス会長 満島 裕二

いよいよ、熊本高専がスタートいたしました。

私たち後援会も、これから新たな歴史を刻んでいく熊本高専を、傍観者として見るのではなく、熊本高専を形作る一員として、共に歩んでいかねばならないと考えています。

そこで、私たち後援会は、熊本高専のスタートに向けて下記のとおり、様々な取り組みを行ってきました。

- ① 学生会との意見交換会・・・7 月 15 日（水）龍峰会館多目的室
- ② 熊本電波高専奨学後援会（当時）との懇談会・・・7 月 25 日（土）

くまもと県民交流館パレア

- ③ くま川祭り総踊りへの参加（同窓会主催）・・・8 月 8 日（土）グランドホテル集合
- ④ 同窓会との合同忘年会・・・12 月 4 日（金）金之助

以上の取り組みは、熊本高専のスタートを機に、学生会、熊本キャンパス後援会、同窓会との交流を深めていく事で、後援会の活動を充実させ、より一層の学校運営の円滑化ならびに学生の学習環境の向上に一助となればと考えての事です。

また、10 月 9 日（金）には、40 名の参加を得て、鹿児島県の京セラ川内工場、田舎酒造の視察研修を行い、11 月 7, 8 日の高専祭には、学生会に配慮していただいて中庭ステージ横のスペースで、活動風景の写真展示を兼ねた憩いの場を設けました。

支援事業としては、学校施設充実積立金から、体育館で使用する 300 インチスクリーン、縫帳など、ロボコン大会などで使用するハッピとのぼり旗の購入を全額援助し、課外活動クラブのユニフォーム代の半額を助成しました。

今後の活動としては、熊本キャンパス後援会との協議を重ねて、会則や会費の摺り合わせについての一定の結論を、今年度中に出せねばと考えています。

後援会会員の皆様には、熊本高専の発展と学生たちの更なる飛躍のために、後援会活動に対してのご理解とご協力を心からお願いいたします。



保健室だより

● 熊本キャンパス 保健室より

保健師 中西 博子

新型インフルエンザ対策 <1 予防対策>なぜ必要なのか？

1) 外出後の手洗いとうがい、手指消毒（アルコール製剤のもの）

石けんで15秒以上洗い、流水で流しましょう。接触感染を防ぐ

うがいは、うがい薬を用いると効果的に気道内に付着した細菌やウイルスを体外へ洗い流す作用があります。

2) マスクの着用 濡度を保ちウイルスが体の中に入ってくるのをある程度、防ぐことができます。もしも感染してしまったら、他の人に感染を防ぐ効果もあります。飛沫感染、空気感染を防ぐため

※咳エチケット

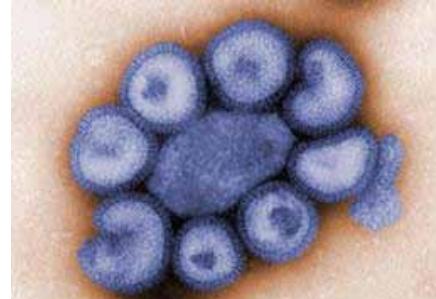
3) 人混みに行かない 感染しないよう不必要な外出を避けましょう。

ウイルスとの感染の機会を作らないようにするため

4) 環境の管理と洗浄（換気、湿度調整、清掃）

気温20～25度、湿度50～60パーセント程度に保ちましょう。湿度が高いとウイルスの生存率が低下するといわれています。換気により浮遊しているウイルスを室内から排出する。ウイルスで汚染された場所を清掃により除去する。

5) 十分な休養とバランスの良い食事（睡眠と栄養） 体力、抵抗力を高めておきましょう。良質な睡眠は免疫力を高めるホルモン分泌をたすけ、栄養は免疫力を活性化する。



インフルエンザウイルス

● 八代キャンパス 保健室より

保健師 反頭 昭子、山下 智子

今年の4月末からの新型インフルエンザの感染は全国に拡大しています。本校では、10月に入り、クラスの保健委員さんの活躍で「健康観察」を始めました。これらの活動を通して、1日の自分の体調チェックを、今、経験しています。これから先の社会生活の中で、これらを取り入れて欲しいと思います。これまで、なかなか自分自身に目を向ける習慣がなかったのではないかと思いますが、ストレス一杯の社会へ巣立つあなた達に、「自分の健康は、自分で守る」という事をしっかりと意識して欲しいと思います。「あなたの平温は、何度かという事が分りましたか？」

うがい・手洗い・洗顔を忘れず、「うつさない・うつらない」をモットーに、インフルエンザウイルスと戦ってください。そして、ワクチン接種が早くできることを願いつつ、健康でありますようにと祈っています。



新型インフルエンザについて（共通）

新型インフルエンザとは、季節性インフルエンザと抗原性が大きく異なるインフルエンザであって、一般にほとんどの方が免疫をもっていないことから、全国的かつ急速な蔓延により生命および健康に重大な影響を与えるおそれがあると認められるものをいいます。通常のインフルエンザに比べると、感染が拡大しやすく、多くの人が感染することが考えられます。感染経路は通常のインフルエンザと同様で、咳やくしゃみとともに放出されたウイルスを吸い込むことによっておこる飛沫感染と、ウイルスが付着したものを触れた後に目、鼻、口などに触れることで、粘膜、結膜などを通じて感染する接触感染が考えられています。

新型インフルエンザの症状は、突然の高熱、咳、咽頭痛、倦怠感に加えて、鼻汁・鼻閉、頭痛であり、季節性インフルエンザと類似しています。ほとんどの方が軽症で回復しています。ただし、持病がある方のなかには、治療の経過や管理の状況によりインフルエンザに感染すると重症化するリスクが高い方がいます。手洗いの励行、うがい、人混みを避けるなどして感染しないよう注意してください。また、周囲の方も感染させないように配慮しましょう。

● 地域イノベーションセンター「社会人講座」スタート

新設された本校の地域イノベーションセンターの「社会人講座:3次元CAD/CAE/CAM活用力養成講座」が10月10日(土)よりスタートしました。この講座は、中小企業団体中央会の「ものづくり担い手育成事業」に採択されたもので、就職待機者等への就労支援も兼ねています。講座は、3次元CADを活用して強度や熱解析等を行うCAE(コンピュータ援用解析)、NC加工等での自動成形を目指すCAM(コンピュータ援用製作)など、加工現場での技術修得・設計力養成をめざすもので、本校の機械知能システム工学科と技術室が中心となって担当します。八代商工会議所との共催で受講生募集を行い、10月10日から12月19日までの3ヶ月に亘り、毎週土曜日:計11回、八代キャンパスで開講しています。



● マイクロマウス九州地区大会を開催

10月18日(日)、第19回九州地区大会(主催・財団法人ニューテクノロジー振興財団・マイクロマウス委員会九州支部)が、昨年度に続き、熊本キャンパスで開催されました。マイクロマウス競技は自立型ロボットが独力で迷路を探索し、通過に要する最短時間を競う競技です。ハーフサイズ競技とクラシック競技との2部門で全国大会出場を目指し、県内外の社会人・学生などが製作した計13台が参加しました。

結果は、熊本キャンパス・情報通信エレクトロニクス学科の葉山清輝准教授と研究室学生の同学科5年南昂孝君が、それぞれ2位・3位に入賞し、支部長賞とともに全国大会シード権を獲得するなど活躍しました。



● 熊本県中学校プログラミングコンテストを実施

10月25日(日)、八代キャンパスにおいて、県下の中学生を対象とした「熊本県中学校プログラミングコンテスト」が実施されました。今年で3回目となる本コンテストに、4中学校から43名の中学生が参加し、4つの部門に分かれて競技やプレゼンテーションを行いました。フリー部門では、「だれにでも楽しめるゲームを作ろう」というテーマのもと、中学生達が考えたアイディアいっぱいの楽しいゲームについてのプレゼンテーションやプレイデモを行いました。制御部門では、「C-1GP」と題してライントレースロボットのレースを行い、当日の朝に発表されたコースをいかに早く正確にゴールすることができるかが競いました。デザイン部門では、「100年後の乗り物を考えよう」というテーマで、100年後の未来を想像しユニークな発想でデザインされた乗り物が発表しました。Web部門では、「学校の自慢を紹介しよう」というテーマで中学生達が工夫を凝らして作ったホームページが発表されました。中学生は、緊張しつつも楽しみながらプログラミングコンテストに参加できたようでした。



● 天草地区で「水産関連業者の方のための产学交流・個別相談会」

地域イノベーションセンターが中心となり、10月28日（水）に、天草地域産業雇用創出協議会、天草信用金庫、長崎大学共同研究交流センター、JSTイノベーションプラザ福岡と共同した、天草地区「水産関連業者の方のための产学交流・個別相談会」を実施しました。この相談会は、天草地区的水産関連業者の方々が抱える悩みに対して、产学官が連携して、個々の業者が抱える問題の解決を支援しようとする試みです。当日は、課題を克服して成長しようとする意欲に溢れた水産関連業企業の方々が多数集まり、開場の9:30から16:00の閉会まで、個別のテーブルに分かれて、魚介類の養殖法や赤潮対策等について、様々な技術相談が行われました。



● SPP 連携授業開始 「生物の不思議（細胞分裂の観察）」を実施

本校が、毎年、科学技術振興機構（JST）の支援を受けて実施している、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）事業の、本年度最初の中学校との「連携理科授業」が、10月30日（金）から始まりました。



今回は、八代市立東陽中学校の3年生18名を迎えて、「生物の不思議（細胞分裂の観察）」をテーマに実施しました。中学生たちは、ニンニクの根の先端の細胞を顕微鏡で観察したり、染色体を自分の目で直に見てもらう実験授業を体験してもらいました。また、より高倍率・高精度で観察できる電子顕微鏡の説明も受け、動植物の微細な表面画像撮影などのデモも体験してもらいました。

● セミコンジャパン 2009 に研究成果を出展

12月2日から4日まで、千葉の幕張メッセで開かれたSemicon Japan 2009のイベント、THE 高専@SEMICONに、熊本キャンパス・制御情報システム工学科中島栄俊准教授の研究室が参加・出展しました。このイベントは、全国の高専で行われている研究・開発の内容を、セミコン業界の方々にも広く知ってもらうことを目的として開催されており、東京エレクトロン（株）が中心となり、賛同企業の展示ブースの一部（熊本高専は荏原製作所）をお借りするかたちで展示したものです。今回は、「無線LANによる遠隔操作モデルカーの開発」について出展し、好評を博しました。



シンボルマークデザイン応募作品



編集後記

「熊本高専だより」創刊号をお届け致します。

本誌は、本年10月に発足した「熊本高専」のスタートをかざる第1号です。10月16日(金)に挙行した「開校記念式典」の式辞や、新しい学科長&新センター長のスタートメッセージなど、新高専を紹介する記事を中心に編集・掲載しました。お忙しい中、ご寄稿いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

本校と本誌が、今後さらに充実し、愛されるものになっていくよう、関係の皆様のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

熊本高専だより 創刊号

独立行政法人 国立高等専門学校機構 熊本高等専門学校

(熊本キャンパス) 〒866-8501 熊本県合志市須屋 2659-2

TEL 096-242-2121

(八代キャンパス) 〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

TEL 0965-53-1211

熊本高専ホームページ <http://www.kumamoto-nct.ac.jp/>

総務委員会 平成21年12月 発行